

序 文

教養文化研究所所長 廣 野 行 雄

竹中彌生先生と Martin Foulds 先生が2015年3月末を以て定年退職を迎えられた。以下、両先生にまつわる思い出を書きつづることによって惜別の思いを表したい。

竹中先生は希有な海外経験の持ち主である。外交官でいらっしゃった御先考にしたがって戦後間もない時期に、まずアメリカに渡られ、ついで冷戦下のソヴィエト・ロシア、東ドイツに浮かんだ孤島のような西ベルリンといった、いわば世界史的な場で少女時代を送られ、人と成られたのである。ご結婚後も長い間夫君の任地であるロンドンやパリに暮らしておられた。だから、先生は、英・独・仏の三カ国語に通じておられる。それも並たいていの語学力ではない。先年本学を退職なさった P. McCARTHY 先生が、竹中先生を完璧なバイリンガルであると認めておられたことから、それは裏付けられる。たしかネイティブスピーカーとして英語を教えるライセンスさえおもちゃだったかと思う。わたくしのように、ほとんど教室語学の経験しかない者にとっては、想像も及ばぬ境域である。

先生その異能ともいうべき語学力と海外での豊かなご経験が、ご専門の演劇研究に存分に活かされたことはいまでもないが、ご交際の範囲を普通人の何倍にも押し広げたであろうこともまた想像に難くない。教養文化研究所の所長でいらっしゃったところ、先生が紹介される講演者の多彩さに舌をまいたものであった。

彌生とは旧暦の晩春三月、万物の生命力がいよいよさかんになること、そしてそれが目に見えてたち現れること、即ち「弥や生ひ」の転じたものではあるまいか。もし先生の人となりを一言で言い表せといわれれば、それは「生命力」ではないかと思う。日頃学内の様々な場において、なにごとによらず、ご自分の意見 — 多くの場合ポジティブでチェアフルな — を率直かつ情熱的にお話になる先生のお姿に接するたびに頭に浮かんだのは、馬琴の稗史にいう名詮自性という言葉であった。もちろん、上に記したように、同調や自己抑制よりも、競争的で強く個性を打ち出すことに高い評価を与える社会で多感な時期を過ごされたことが、大きく影響しているであろうことは言うをまたないのではあるが。

いずれにしろ、ややもすれば思考の方向が内向的、悲観的になりやすいわたくしのような人間にとって、先生の自信に満ちた向日性は、頼もしくもまた羨ましいも

のであった。

フォールズ先生の故国は、かつて七つの海を支配した「日の沈まぬ帝国」である。それかあらぬか、竹中先生に引けをとらぬ多彩な海外経験をおもちである。その足跡は、最初の大学に入られた六日戦争(第三次中東戦争)前のイスラエルに始まって、スペイン、フランス、イスラム革命以前のイラン、そして日本に及ぶ。上智大学で二度目の学生生活を始められた先生は、それまで様々な寄港地を経て航海してきた先生という船を、この祖国から最も遠い極東の国につなぎ止めるアンカーとなった令閨と出逢われ、また、江戸時代の美術、特に先生をして今やその研究の第一人者たらしめている円山派の絵師鈴木南嶺と出逢われた。

南嶺に魅せられた先生は、毎年のように彼や彼とつながりのある絵師たちの埋もれた遺墨を求めて日本各地を訪ねられた。夏休み明けの教員控え室で、旅先での出来事を楽しもうかがったものだった。南嶺が丹後田辺藩牧野家にゆかりの絵師であったことからとりわけ舞鶴へいらっしやる頻度は群を抜いて多かったようで、同地から名誉市民の称号を贈られたという一事をもってしても、南嶺研究にかける先生の熱意がうかがえる。

フランスの現代思想とともに仏教思想にも造詣の深い同僚に、長年疑問に思ってきたことを尋ねたときのことである。『無量寿経』によると、阿弥陀如来が宝蔵菩薩であった昔、四十八の誓願を立てたが、その第十八願に、一切衆生を済度しなければ仏とならぬ、とあるけれども、人間はこの瞬間にも次々と生まれてきているのだから、一切衆生を済度するという誓願は現在もまだ実現途上にあることになる。一方、阿弥陀如来は、如来というからにはすでに仏になっていらっしやる。これは矛盾ではあるまいか。このいかにも子どもじみた問いに対して、その同僚は、半ば真面目に、また半ば冗談めかして、じゅうぶん仏になれるのだけどならない、ちょうどフォールズさんが教授になろうとしないようなものだよ、と答えたのだった。わたくしは、答えそのものにもなかなか服するところがあったが、同時に、いやそれ以上に、日頃はどちらかといえば辛辣な人物月旦をする彼が、なんとフォールズ先生を阿弥陀如来に喩えたことに、彼もまたフォールズ先生の名利に執着しない駑蕩とした人柄に、わたくし同様敬意と親愛の念をもっていることを感じて、驚きもし、嬉しくも思ったのだった。

竹中先生、フォールズ先生、この外貌はいずれもまごうかたなき東洋人と西洋人であるお二方が、一方は、戦後教育がわれわれにかくあれかしとした、西洋的な確乎たる個のエートスを身につけられ、一方は、われわれにおいて日々に薄らぎつつ

ある，東洋的な絜矩の道の実践者になっておられることに文化というものの，ひいては人の在り方の玄妙さを感じないではいられない。

両先生ともに退職後もこれまで以上にご研究にそして社会貢献に積極的に取り組まれるご意向をおもちであるとうかがった。どうかくれぐれもご健康に留意され，いつまでもお元気でご活躍なさることをお祈りするとともに，その高い志を受け継ぎたいと思うものである。